

十月のテーマ 気づきを活かす

いざの時、 どうするか

本 人の意志や真情などに反して、思いがけなく起こる困った（不幸な）できごとを事故という。この事故は日常生活にしばしば起きる。予想もできないようなことが、突然に起きる。

乗りものには、いつも危険がつきまといっているのだが、このほか地震、火事、盗難、急病その他による事故の種類は数え切れぬほどだ。そうした事故に出会ったら、いったいどうしたらよいのか。

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。

丸山竹秋



え・古屋智子

事故の種類は数限りないほどあるのだから、それから逃れる手段もまた、実にさまざまである。地震が起きたらすぐ火を消すとか、ガスの元栓をしめるとか、また頭から何かかぶるとか、机の下にもぐりこむとか、いろいろだ。しかしそうしたさまざまなる手段方法の、もうひとつ根本になるもの、すべてに共通するもの、それを知っておくことが必要となる。それは何か。

サツとひらめいた第一感によって行動する！ これである。

「落ちつけ」とひらめいたら落ちつくのだ。「急げ」と心が叫んだら急ぐ

のだ。「よくあたりを見廻せ」とパツと来たらただちにそうする。「ガスの元栓をしめろ」と浮かんたらすぐそうする。「前にかがめ」と出たら、そのとおりにする。

「なあんだ、そんなことか。それでいいの」などと馬鹿にするなかれ。とっさの場合には、それしかなかく、またそれが最も頼りになるのである。せっかくパツとひらめいても、ぐずぐずしては、取り返しがつかなくなろう。

冷静な第一感は、天から降り、地から湧く叡智（えいち）なのだ。あわてたり、怒ったり、悲しんだり、怨（うら）んだりして心が動転していると、こうした第一感がひらめかなかつたり、また、まちがった判断となったりして身を誤る。

いざの時は、あわてもしよう。動揺もしよう。しかし「ここだ」と雑念を捨てる。その瞬間、ひらめくものが必ずあるのだ。

「きれいさっぱり、あきらめよ！」とピンときたら、それはそれでよいのである。死を覚悟したために、あわてる心が消え去って、開いた扉

からゆうゆうと外へ出、九死に一生を得た例もある。神の眼からみて、本当にだめなときは、何としてもだめであろう。それなら、それでよい。やむを得ないのだ。しかし、せっかく叡智が「こうしなさい」と教えているのに、それに反抗する必要がどこにあるのか。

「すぐ警察にとどけて処置を仰ごう」とピンと来たのに「まあ、まあ、名誉にかかわることだから隠しておけ」と、次に出た欲心に目がくらみ、取り返しのがなくなつた例などはあまりに多い。

「これが果たして第一感なのか」と迷うこともあるだろう。第一感と思つても正確でないことがあるのは、勝負ごとの手段を選ぶときに、しばしば経験する。しかし第一感かどうかと迷っているようでは、それは第一感ではないと知るべきである。

私欲に心がにごっているときは、まちがった判断が生ずる。また平素気がついてひきのばしを繰り返しているとき、いざのとき正しい判断はひらめかない。

（月刊『新世』一九八二年六月号より）